

修身初訓 七

272
387

大日本教育會館藏			
一	五	一	一
冊	號	架	函

函架號

東子

K

宮本茂任先生
宗盛年先生
合著

版權所有

修身初訓

明治十五年
五月刻成
連璧社藏

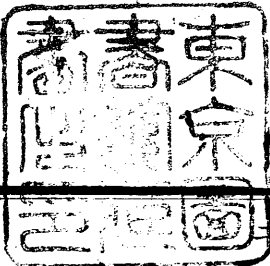
修身初訓卷之七

緒言

是中等第五年前期ニ用井ン爲編輯セシ者ナリ
卷中載ル所七章ニ分ツ、敬身、孝弟ノ艱難、報國盡
忠ノ刻苦、益世、忍耐、雅量、決斷是ナリ、諸科是ニ至
テ頗ル進ム、宜ク心カヲ悉シ、之ヲ事業ニ措ン
念フヘシ、

明治十五年

編者識



修身初訓卷之七

宗 盛年編輯
宮本茂任校閱

第一章

○孔子曰久鬼神ノ徳タル其盛ナルカナ之ヲ視レ
氏而モ見エス之ヲ聽氏而モ聞エス物ニ體シテ遺
ス可ラス天下ノ人ヲメ齊明盛服シテ以テ祭祀ヲ
承ケシム洋々乎トメ其上ニ在ルカ如ク其左右ニ
在ルカ如シ詩ニ曰ク神ノ格ル度ル可ラス矧ンヤ

射フ可シヤ、夫微ノ顯レ、誠ノ揜フ可ラサル、此ノ如キカク

○孔子曰久民ノ義ヲ務ム鬼神ヲ敬シテ之ニ遠サカル

○神ヲ瀆ス丁母レ、枉レルニ循フ丁母レ、礼記
神武天皇日向ヨリ東征シ、中原ヲ平定シ、都ヲ大和ノ橿原ニ定メ、紀元四年、靈時ヲ鳥見ニ立テ、皇祖大神ヲ祭り玉フ、詔ニ曰ク、我皇祖ノ靈ヤ、天ヨリ降鑒シ、朕カ躬ヲ光助シ玉ヒ、今諸虜已ニ平キ、海内無事ナリ、以テ天地ヲ郊祀シ、大孝ヲ申フ可シト、

○崇神天皇六年、三種ノ神器ヲ大和ノ笠縫ノ邑ニ遷奉シ、天照大神ヲ祭ル、皇女豐鍬入姫ニ命シテ、常ニ祀事ヲ侍掌セシム、是ヨリ先、列朝皆神器ヲ殿内ニ安ンシ、牀ヲ同フメ、卧起ス、帝其褻瀆ヲ惧ル、故ニ此舉アリ、別ニ劍鏡ヲ摸造シ、之ヲ御座ニ置キ玉フ、

○唐ノ孔戣、廣州刺史トナル、此州南海ニ瀕シ、海神ノ廟アリテ、天子ノ尊崇スル所ナリ、然レ氏祭祀ノ頃、例大風多クシテ、前ノ刺史波濤ヲ懼レ、事ヲ副官ニ委子代テ祭ラシム、廟官ノ修繕モ亦惰ル、盲風恠

雨常ニ多久民其害ヲ蒙ル孔戣人トナリ正直方嚴
中心樂易神ニ事ルニ誠ヲ以テス祭祀ノ期ニ及ヒ
風雨アリ官屬前ノ刺史ノ例ニ循ヘト勸ムレ氏孔
戣聽ス舟ニ乘レハ風雨少ク弛ヒ陰雲破解シ日光
穿漏シ擢夫勞セス祭祀ノ時天地開明月星晴朗ナ
リ孔戣盛服シ笏ヲ執リ祭典ヲ行ス文武官屬首ヲ
俯セ各其職ヲ執ル皆海神ノ來リ享ルヲ覺ス祭事
全ク備リ風災熄滅シ人魚蟹ニ飽キ五穀皆熟シ明
年廟宮ヲ營メ規模ヲ大ニス孔戣政ヲ爲ル刑德並
ヒ行ハレ盜賊跡ヲ絶テ父老歌詠セリ、

第二章

○父母過アレハ氣ヲ下シ色ヲ怡フシ聲ヲ柔ニシ
テ以テ諫ム諫メ若シ入ラサレハ敬ヲ起シ孝ヲ起
シ悦ヘハ則復諫ム説ヒサルト罪ヲ鄉黨州閭ニ得
ルト寧口孰諫メヨ父母怒リ悦ヒスシテ之ヲ撻テ
血ヲ流ストモ敢テ疾ミ怨ミス敬ヲ起シ孝ヲ起セ
礼記

○舜ノ親ニ事ヘテ悦ヒサル丁有ル者ハ父頑ニ母
罵ニ人情ニ近カラサルカ爲ナリ若シ中人ノ性其
愛惡理ヲ害スル丁無カ若キハ必ス姑ク之ニ順ヘ

親ノ故舊喜フ所ノ若キ當ニカヲ極メテ招キ致ス
ヘシ賓客ノ奉ハ當ニカヲ極メテ營ミ辨フヘシ務
メテ親ヲ悦ハシムルヲ以テ事トシ家ノ有無ヲ計
ルヘカラス又コレヲメ其勉強勞苦ヲ知ラサラシ
ムヘシ苟モソノ爲シテ易カラサルヲ見セシムレ
ハ亦安ンセス 張橫渠

○人孰カ親ニ孝シ兄ニ悌セサラン唯行其心ニ副
フコト能ハサルノミ苟シ其行ヲ舍キ其心ヲ論ス
レハ則天下ノ人皆孝子悌弟ナリ 龜井南冥正文
孝經序

○筑前國宗像郡武丸村ノ正助ハ世農夫ナリ父正

三郎極貧ニテ田宅ヲモ有セス僅ノ商賣シテ世ヲ
渡レリ子二人アリ兄ハ即チ正助ナリ妹ハ同村仁
右衛門カ妻ナリ正助母子人ノ奴婢トナリ給米ヲ
貯ヘ置キ宅ヲ買ヒ父ヲ住セケル正助能ク主人ニ
事ヘ其暇ニ山林ノ棄地ヲ開キ親ヲ養フ便トス二
十餘歳ノ頃母子共ニ奉公ヲ罷メテ家ニ歸リ田貳
段許ヲ買得テ兩親ヲ養フ父酒ヲ好ミケレハ日々
少シツ、求メテ之ヲ薦ム酒家感シテ價ヲ取ラサ
ルニ至ル正助宅中ニ井ナシ毎朝二町餘隔レル川
水ヲ汲テ歸リ湯ニ湧シ父母ニ手水ヲ進ム或夜誤

テ父ノ杖ヲ踏ミ泣ク丁其足ヲ踏シカ如シ正三郎六十歳中風ヲ病ミ咫尺モ歩行スル丁能ハス正助常ニ五六町ノ路ヲ背負ヒテ其妹ノ家ニ送迎ス一日妹ノ家ニテ涙數行ヲ流ス妹怪ミ其故ヲ問フニ今日父ヲ負フニ他日ヨリ輕シ稍ク老衰セシヲ思ヒ覺ヘス涙溢レシト答フ其後父正三郎七十六歳ニテ終リ又正助痛哭ハ固ヨリナリ享保中西國蝗災ニテ筑前モ亦頗ル害ヲ被レリ獨武丸村正助カ田ノミ少シモ害ナク秋實常歳ニ異ナラス人皆天道善ニ福スル人必ストスヘキヲ驚歎セリ此ノ如

キ大孝ノ者ナレハ名聲闔郡ニアフレ遂ニ藩廷ニ聞達シ田地及米錢等ヲ賞與セラレシコト凡ソ幾田ナル丁ヲ知ラス其後母ハ八十六歳ニテ病死セリ正助悲哀父ノ没時ニ異ナラス而メ正助ハ八十七ニテ死セリ其後藩主黒田氏正助及ヒ兩親ノ墓ヲ修理セシメ遂ニ自ラ至テ香火ヲ供シ其曾孫源助ヲ召シ三段八畝ノ田地ヲ賜ヒ世々稅役ヲ除カレタリ

○備前國淺口郡六條院村ノ民ニ子アリ兄総十郎トシ弟ヲ市助トス早ク父ヲ喪シ祖父ト耕種ヲ力

ハ、不幸ニシテ、祖父聾聵トナリ、手脚モ亦痿痺ス、母
子三人之ニ事ヘ、並ニ皆至孝、祖父酒及ヒ茶ヲ嗜ム、
兄弟貪ト雖モ、之ヲ闕クナシ、凡ソ飲食ハ、祖父ニ
進ムル所、常ニ精エノ、自ラ喫スル所ノ者ハ、常ニ粗
ナリ、食フ毎ニ、母必ス箸ヲ執リ之ニ哺セシム、濁器
モ亦兄弟ト日ニ自ラ之ヲ操ル、冬夜ハ則兄弟力ハ
ルカハル祖父ノ趾ニ卧シ、其足ヲメ暖カナラシム、
夏夜ハ則兄弟力ハルカハル寢ズシテ蚊ヲ驅ル、兄
弟孝順ステニ此ニ至ルト雖モ、而モ母ナホ或ハ怠
アラントヲ恐レ、屢之ヲ戒メテ曰ク、太父危殆朝夕

ヲ謀ラス、一旦不諱アラハ、孝ヲ欲スト雖モ、誰カ爲
ニカ孝セシ、爾等此ヲ念ヘ、兄弟謹諾ス、最後祖父忽
チ心疾ヲ發シ、狂悖殊ニ劇ナリ、是時ニ當リ、市ハ人
ノ役トナリ、家ニ在ラス、唯母ト総ト、日夜睡ラス、敬
ンテ之ヲ護持ス、又ニ稔ニメ没ス、母総ト哀慕ニ勝
ヘス、衣ヲ賣テ以テ喪祭ニ供ス、總カ父遠忌、亦此ノ
時ニアリ、追薦セント欲シテ、錢穀ナシ、是歲登ラサ
ルニ會フ、國主倉ヲ發テ以テ賑濟ス、總ソノ米ヲ受
ケ、即チ以テ父ヲ祭リ、毫モ食ヲ謀ル意ナシ、市モ亦
遠方ニ在ト雖モ、物ヲ寄セ祭ヲ助ケ、時々微俸ヲ分

子饋リ、或ハ書ヲ村老ニ致シテ曰ク、我母及ヒ兄、モシ窮スルコトアラハ、請必ス假貸セヨ、我歸テ即償シ、其後総妻ヲ娶リ、相與ニ母ニ事ス、因テ妻ニ謂テ曰ク、不才ハ我咎ムル所ニ非ス、苟モ不孝ナラハ、即汝ヲ出サント、是ニ繇テ妻モ亦克謹ム、瘠田若干頃アリ、連年祖父ノ疾ニ侍シテ、耕シ耨ルニ暇アラス、理當ニ荒蕪スヘシ、而ノ其稼反テ他人ノ田ヨリ美ナリ、是レ冥々ノ中ニ之ヲ祐クル者アツテ然ルカ、國主モ亦母子ニ米ヲ與ヘ、之ヲ嘆賞スト云ス、

第三章

○子曰ク、志士仁人ハ、生ヲ求メテ以テ仁ヲ害スルコトナシ、身ヲ殺シテ以テ仁ヲ成スコトアリ、

○孟子曰ク、富貴モ淫スコト能ハス、貧賤モ移スコト能ハス、威武モ屈ムルコト能ハス、此之ヲ大丈夫ト謂ス、
○富貴福澤ハ、マサニ吾生ヲ厚フセントス、貧賤憂戚ハ、庸テ女ヲ成スニ玉ニスルナリ、張子厚

○忠臣ハ二君ニ事ヘス、烈女ハ二夫ニ更メス、王蠋
○平野國臣通稱ハ次郎、筑前福岡ノ人、藩ノ銃手タリ、嘗テ江戸ノ邸ニ祇役シ、路京師ニ入り、禁闕ヲ拜ス、既ニ江戸ニ至リ、寛永増上二寺ニ遊ヒ、其宏壯ナ

ル、大内ニ過絶スルヲ見テ、大ニ憤懣ス、此頃墨使
入港シ、和戦ノ議論沸騰ス、國臣之ヲ見聞シテ、幕府
諸藩トモニ恃ムニ足ラスト、武技ヲ練リ、兵書ヲ讀
ム、後長崎ニ適キ、英佛二國入港シ、幕吏其無礼ヲ甘
シ受ルヲ見テ、益憂憤ヲ抱キ、悉ク其書籍ヲ售リ、甲
冑ヲ買フ、幾クモ無シテ、攘夷ノ勅書ヲ、水戸中納言
ニ賜フト聞キ、國臣欣然トシテ、時至レリトテ、遊學
ニ託シ、姓名ヲ變シテ、潛ニ入京シ、諸名士ニ會シ、義
舉ノ意ヲ論説ス、又近衛中山諸公ニ謁見シ、頗ル愉
快トス、適幕吏入洛シテ、諸名士ヲ捕ヘテ、江戸ニ護

送シケレハ、國臣慨歎シテ、京師ヲ去リ、東西ニ奔走
シ、素志ヲ成サンコトヲ求ム、薩藩ノ依頼スヘキヲ知
リ、福岡ノ使也ト偽リ、其書函ニ、自著ノ回天管見策
等ヲ納メテ、藩廷ニ達シタリ、藩主ノ生父和泉、明春
上京シテ、一舉スルノ志アリト、密語セリ、明年、大坂
ニ上リ、諸志士ヲ會シ、島津氏ノ至ルヲ俟ツ、國臣先
ハ京シ、就テ密奏ヲ託ス、此書終ニ九重ニ達シ、後ニ
勅使關東ニ下向ノ日、此奏中ノ説ヲ採用セラレ、平
野二郎ノ名益顯レタリ、又自述ノ國體辨ヲ、學習院
ニ献ス、朝廷國臣等ヲ召シテ、學習院出仕トス、此時

天皇神武帝ノ陵ヲ拜シ、親征ヲ議セントノ勅ヲ下シ給ス、既ニメ朝議大ニ變シ、長門中將ノ警衛ヲ罷ス、其入洛ヲ禁シケレハ、西三條中納言等七人ヲ奉シテ、其國ニ還ル、幕吏國臣ヲ襲ヒ捕ヘントセシカ氏、酒樓ニ遊フヲ以テ免レタリ、周防ニ下リ、澤前主水正ヲ奉シ、吉野ノ義徒ニ應セントシ、播磨ニ至リシニ、吉野既ニ潰エヌト聞エケレ氏、止マル可キニ非ス、但馬ニ入り、使ヲメ仙石氏ニ告シム、仙石氏其使ヲ捕ヘテ、幕府ニ報ス、澤氏ノ從者之ヲ聞キ、京師ニ迫リ、攘夷ノ舉ヲナサント、檄ヲ傳ヘシニ、土人志

士等、群起來聚シ、近畿大ニ動揺ス、幕吏驚キ、一二ノ藩ニ命シテ攻撃セシム、國臣澤氏ヲ奉シテ、養父郡妙見山ニ據リテ拒戦ス、其兵或ハ潰散シ、或ハ反應ス、銳九國臣カ腰骨ニ中リ、終ニ支フ可ラサルヲ知リ、澤氏ヲ勸メテ走ラシメ、自ラ西ヲ指シテ走リシニ、朝來郡、網場村ノ舟中ニテ捕ヘラレ、京師ノ獄ニ下サレケリ、明年長門藩ノ兵、輦下ニ至リシカバ、幕吏獄中志士ノ破獄ヲ恐レ之ヲ斬ル、國臣紙筆ヲ乞ヒ、絶命詩歌ヲ書シ、禁闕ニ向ヒ、再拜稽首シ、從容トシテ刑ニ就ク、國臣西鄙ノ一銃手ヲ以テ、朝廷ノ陵

夷ヲ傷ミ、妻子ヲ棄テ、四方ニ流寓シ、辛苦ヲ忍ビ、百
敗スレト挫ケス、其志遂ケスト雖モ、亦明治維新、嚆
矢中ノ人也、

第四章

○學者最時日ヲ惜ム、丁ヲ要ス、豈時ヲ廢シ、日ヲ曠
スベケンヤ、古語ニ曰ク、天地万古アリ、此身再得ズ、
人生只百年、此日最過キ易シ、幸ニ其間ニ生ル、者、
有生ノ樂ヲ知ラサル可ラズ、虚生ノ憂ヲ懷カサル
可ラズト、此六句時々吟玩スベシ、初学知要

○善其身ヲ愛スルモノハ、能一生ヲ以テ萬載ノ業

ヲナス、或ハ一日ヲ以テ數百年ノ休ヲナス、自ラ愛
スル、丁ヲ知ラサルモノハ、其聰明ヲ以テ盛時ニ際
シ、名器ヲ操リ、徒ニ以テ其一己ノ私ヲ就スノミ、蔡清

○皇邦古代殉死ノ事アリ、垂仁帝ノ朝、野見宿禰之
ヲ恤ミ、創意土偶ヲ造リ、山陵ノ從衛トス、齋藤馨曰
ク、山陵人ヲ殉ス、不仁ナリ、埴ヲ以テ人物ノ象ヲ作
リ、此ヲ用テ人ニ易ヘ、以テ後世ノ法トス、然ラハ則
垂仁以後天下臣子、惴々穴ニ臨ムノ死ヲ免ル、丁
ヲ得タリ、宿祢一夕ヒ土ヲ搏ハシテ、千百死スヘキ
ノ人皆死セス、仁ト謂ハサルヘケンヤ、

青砥藤網嘗滑河ヲ過ク誤テ錢十文ヲ水中ニ落
ス、藤網乃錢五十文ヲ出シ炬ヲ買ヒ夫ヲ雇ヒ水ヲ
照シテ搜索ス、竟ニ之ヲ獲タリ、或其得失ヲ償ハサ
ルヲ笑フ、藤網曰ク、然ラス、十錢小トイヘ氏、失ヘハ
則永ク世寶ヲ損ス、五十錢布テ民間ニ在リ、彼此六
十錢終ニ一錢ヲ失ハス、其利亦大ナラスヤ、聞ク者
歎服ス、藤網性施與ヲ好ミ、入ル所俸祿悉ク貧困ヲ
賑シ、自奉スルヲ甚薄ク、衣縑帛ナシ、

○野中兼山ハ土佐ノ人ナリ、嘗テ江戸ヨリ歸ルニ、
預メ書ヲ郷人ニ致シテ曰ク、土佐物トシテ有ラサ
ルヲナシ、此行齋ラシ歸ル所、惟蛤蜊一艘アルノミ、
海路幸ニ恙ナクシテ、歸日ヲ以テ之ヲ饋ラント、衆
以異味ヲ嘗ムトス、日ヲ計テ歸ヲ待ツ、既ニ至レハ
則命シテ其漕スル所ヲ城下ノ海中ニ投シテ、一箇
ヲ餘サス、衆怪ク問フ、兼山笑テ曰ク、此獨コレヲ卿
ニ饋ルノミナラス、卿ノ子孫ヲメ亦之ニ飲カシメ
ンナリ、此ヨリ後果シテ多ク蛤蜊ヲ生シ、遂ニ名産
トナル、衆始テ其遠慮ニ服ス、

○後漢蔡倫、字ハ敬仲、和帝ノ時、中常侍ニ轉シ、尚方
ノ令ヲ加フ、秘劍及ヒ諸器械ヲ監作ス、精工堅密ナ

備身初言 卷之十一 近世書林
ラサル丁ナシ、後世ノ法トス、古ヨリ書契、多ク編ム
ニ竹簡ヲ以テス、其縑帛ヲ用井ル者、之ヲ謂テ紙ト
ス、縑ハ貴フシテ、簡ハ重シ、並ヒ二人ニ便ナラス、倫
乃造意シ、樹膚麻頭、及ヒ敝布魚網ヲ用ヒテ以テ紙
ヲツクリ、之ヲ奏上ス、帝其能ヲ善ニス、是ヨリ從ヒ
用井サル丁ナシ、故ニ天下咸蔡侯紙ト稱ス、

○柳宗元、柳州ノ刺史ト爲リ、其土俗ニ因テ爲ニ教
禁ヲ設ク、州人順頼ス、其俗男女ヲ以テ錢ニ質ス、時
ニ贖ハスシテ、子本相侷シケレハ、没シテ奴婢トセ
ント約ス、子厚爲ニ方計ヲ設ケ、悉ク贖ヒ歸サシム、

其尤貧ニシテ、力能ハサルモノハ、其傭ヲ書セシム、
相當ルニ足レハ、則其質ヲ歸サシム、觀察使其法ヲ
他州ニ下ス、一歳ノ比ホト、免レテ歸ル、且ニ千人ナ
ラントス、

第五章

○書ニ曰ク、若シ藥瞑眩セサレハ、厥疾瘳ヘス、
○賢者ノ未遭遇セサルヤ、事ヲ圖リ策ヲ揆レハ、則
君其謀ヲ用井ス、悃誠ヲ陳見スレハ、則上其信ヲ然
リトセス、進仕效ヲ施ス丁ヲ得ス、斥逐又其愆ニ非
ス、是故ニ伊尹ハ鼎俎ヲ勤メ、太公ハ鼓刀ニ困ミ、百

里ハ自鬻キ、甯子牛ヲ飯ス、明君ニ遇ヒ、聖王ニ遭ニ
至ルニ及テ、籌ヲ運シテ上意ニ合ヒ、諫諍スレハ則
聽カル、進退其忠ヲ関ル丁ヲ得、職ニ任シテ其術ヲ
行丁ヲ得、卑辱與溲ヲ去テ、本朝ニ升リ、蔬ヲ離レ踏
ヲ釋テ、膏粱ヲ享ケ、符ヲ剖キ、壤ヲ錫テ、祖考ヲ光シ
之ヲ子孫ニ傳ヘテ以テ說士ヲ資ク、王子淵
○曾子曰ク、士ハ以テ弘毅ナラサルヘカラス、任重
フメ道遠シ、仁以テ已カ任トス、亦重カラスヤ、死シ
テ而後ニ止ム、亦遠カラスヤ、

○顯宗天皇、初弘計王ト稱ス、其兄億計王ト共ニ難

ヲ避ケ、播磨ノ忍海部細目カ家、僮トナル、會國司來
目部ノ小楯來リテ細目カ家ニ宴ス、時ニ二王燭ヲ
秉リ側ニ在リ、天皇竊ニ兄王ニ謂テ曰ク、難ヲ避ケ
テ斯ニ在ル丁數紀、名ヲ顯ス丁方ニ今宵ニ属レリ
兄王曰ク、名ヲ顯シテ害セラレンヨリ、身ヲ全フシ
テ厄ヲ免ンニ孰レソヤ、天皇曰ク、吾ハ去來穗別天
皇ノ孫、而シテ人ニ困事シ、牛馬ヲ飼牧ス、豈名ヲ顯
シテ害ヲ被ルニ若ンヤ、小楯亦二王ヲシテ起リ舞
ハシム、億計王起リ舞フ丁既ニ了リ、天皇乃起リ舞
ヒ、遂ニ歌ニ因テ其系ヲ述玉フ、小楯大ニ驚キ、席ヲ

避久供奉甚謹メリ、還テ具ニ其状ヲ奏ス、清寧帝大ニ喜テ曰ク、朕子ノ以テ嗣トスヘキ無シ、乃迎ヘテ宮中ニ入レ、億計王ヲ立テ太子トシ、天皇ヲ皇子トス、清寧帝崩スルニ及テ太子位ヲ帝ニ讓ル、帝固辭シテ從ハス、是ニ於テ帝ノ姊、飯豐青皇女、朝ニ臨ミ、制ヲ稱ス、幾モ無クシテ皇女薨ス、太子璽ヲ奉シテ勸進ス、天皇辭讓數四、乃位ニ即キ玉フ、

○前漢匡衡、字ハ稚圭、父世農夫、衡ニ至リ學ヲ好ミ、庸作シテ以テ資用ニ供ス、尤モ精力人ニ過絶ス、家貧フシテ燭ナシ、隣舍燭アレ、氏逮ハス、衡乃壁ヲ穿

テ、其光ヲ引テ之ヲ讀ム、邑ノ大姓文不識、家富テ書多キニ名アリ、衡ソレカタメニ客作シテ、償ヲ求メス、書ヲ得テ遍ク之ヲ讀ン、丁ヲ願フ、主人感歎シ、資給スルニ書ヲ以テス、遂ニ大學ヲ成ス、元帝ノ時丞相トナル、

○淮陰ノ韓信、家貧ニシテ自ラ存スルヲ能ハス、常ニ人ニ從テ寄食ス、淮陰屠中ノ少年、信ヲ侮ルモノアリ、衆中ニシテ之ヲ辱カシメテ曰ク、汝ヲ長大ニシテ、好テ劍ヲ帶フト雖モ、中情怯キノミ、能死セハ我ヲ刺セ、能ハスンハ我カ胯下ヨリ出ヨト、信コレ

ヲ熟視シテ、俛シテ膝下ヨリ出テ、蒲伏ス、一市ノ人皆信カ怯キヲ笑フ、後漢ニ仕ヘ大將軍トナリ、高祖ニ説キ三秦ヲ破リ、兵ヲ山東ニ出シ、魏ヲ定メ、燕趙ノ擧シ、齊ヲ撃テ、楚ノ將龍且ヲ斃シ、其勢破竹ノ如シ、項羽懼レテ、トモニ連和シテ、天下ヲ三分ニセシト説カシム、信聴カス、遂ニ項羽ヲ垓下ニ殪シテ、漢家數百年ノ基ヲ開キ、身楚王ニ封セラル、其始テ楚ニ入ルヤ、先キニ巳ヲ辱シメシ少年ヲ召シテ曰ク、汝等皆壯士ナリ、先ニ吾ヲ辱シメシ時、汝ヲ殺ス丁能ハサルニ非ス、顧フニ汝ヲ殺ス氏名ナシ、故ニ

忍ンテコレヲ成スノミ、

第六章

○樂正子ハ孟子ノ弟子ナリ、魯平公ニス、メテ孟子子ヲ見セシメント欲ス、嬖人臧倉、コレヲ沮ムヲ以テ、魯君遂ニ見ズ、樂正子、孟子ヲ見テ曰ク、克君ニ告ク、君タメニ來リ見ントス、嬖人臧倉ト云フ者君ヲハ、ム、君是ヲ以テ來ル丁ヲ果サ、ルナリ、孟子曰ク、行ク之ヲ行カシムル者アリ、止マル之ヲ止ムル者アリ、我輩ノ行ク止ル、人ノ能スル所ニアラサルナリ、吾カ魯侯ニ遇ハサルハ天ナリ、臧氏ノ子、焉ク

シソ予ヲメ遇ハサラシメンヤ、

○左馬頭藤原保昌、人トナリ驍勇膂力人ニ過ク、嘗
夜微行シテ笛ヲ吹ク時ニ大盜袴垂ト云フモノア
リ劫シテ之ガ衣ヲ褫ント欲ス、踵行里許、刀ヲ抽キ
之ニ逼ル、保昌笛ヲ停メ、顧テ其名ヲ問フ、袴垂覺ニ
ス首服ス、保昌曰ク、我嘗汝ガ名ヲ聞ク、汝亦碌々
ル者ニ非ス、吾ニ從テ來レト、復笛ヲ吹キ、徐行シテ
家ニ還リ、絮衣ヲ取り之ニ與ヘテ曰ク、之クハ則復
來レ、慎テ劫ヲ作ス勿レ、

○伊藤仁齋嘗夜郊路ヲ行シニ、盜賊四五人路ニ當

リ各劍ヲ按シテ仁齋ニ迫リ、吾徒ハ醉ハサレハ樂
マス、今酒資盡キタリ、客若シ腰纏ヲ欠カハ、請フ衣
裳ヲ脱セヨト云フ、仁齋自若トシテ曰ク、今日囊中
適空シ、敝緼袍ヲ與ヘンノミ、且汝カ輩何ヲ以テ業
トスルヤ、曰ク、昏夜ニ掠奪シテ自ラ給スルノミ、仁
齋曰ク、此ノ如クナラハ吾又何ソ拒ント、即衣服ヲ
脱シテ之ニ授ク、將ニ去ラントス、賊等仁齋ヲ止メ
テ曰ク、吾儕草竊スル丁數年、未嘗舉止客ノ如キ者
ヲ見ス、抑モ客ハ何爲レノ者ソ、仁齋曰ク、儒者ナリ、
賊曰ク、儒者ハ何事ヲカ爲ル、仁齋曰ク、人道ヲ以テ

人ニ教フル者ナリ人道トハ親ニ孝シ兄ニ弟シ人
 世一日モ無ル可ラサル者ナリ人トシテ道ヲ知ラ
 サル者ハ禽獸ニ異ナラズト言未タ畢ラサルニ賊
 等頓首シテ曰久噫君ト我ト釣ク是人ニシテ事業
 ノ迥ニ異ナルコト此ノ如シ我甚之ヲ耻メ願クハ
 吾儕ノ罪ヲ宥セ今ヨリ反ヲ飲ミテ胃ヲ洗ヒ謹テ
 教ヲ門下ニ奉セント遂ニ皆心ヲ改テ勉勵セシト
 云フ

○唐ノ郭子儀初李光弼ト俱ニ安思順カ牙將タリ
 二人相能ラス席ヲ同フスト雖モ言ヲ交ヘス後子

儀思順ニ代テ將タリ光弼誅セラレシトテ恐レ乃
 詭キ請テ曰久死ハ甘心スル所ナリ但妻子ヲ貸サ
 シトテ乞フト子儀堂下ニ趨リ其手ヲ握テ曰久今
 國乱レ主辱メラル公ニ非スンハ定ムル丁能ハス
 僕豈敢テ私念ヲ懐ンヤ因テ涕泣シテ勉ムルニ忠
 義ヲ以ス即之ヲ薦メテ節度副使トス遂ニ同ク賊
 ヲ破リ纖毫ノ猜忌ナシ

第七章

○孔子曰久三軍ハ帥ヲ奪フヘン匹夫モ志ヲ奪フ
 可ラサルナリ

○孟子曰ク、夫志ハ氣ノ帥ナリ、氣ハ體ノ充ルナリ、故ニ曰ク其志ヲ持テ、其氣ヲ暴フテ無レ、

○成靦齊ノ景公ニ謂テ曰ク、彼モ丈夫ナリ、我モ丈夫ナリ、吾何ソ彼ヲ畏ンヤ、顔淵曰ク、舜何人ノ、予何人ソ、爲ルコトアルモノハ是ノ如シ、公明儀曰ク、文王ハ我師ナリ、周公豈我ヲ欺ンヤ、孟子

○立志ノ工夫ハ、羞惡念頭ヨリ跟脚ヲ起スヘシ、耻ツ可ラサルヲ耻ル勿レ、耻ヘキヲ耻サル勿レ、孟子謂ス、耻ナキヲ之レ耻ツレハ耻ナシ、志是ニ於テカ立ツ、言志畫錄

志學ノ士當ニ自ラ巳ヲ頼ムヘシ、人ノ熱ニ因ル勿

レ、淮南子ニ曰ク、火ヲ乞フハ燧ヲ取ルニ若ス、汲ヲ

寄スルハ井ヲ鑿ルニ若ス、巳ヲ頼ムヲ言フナリ同上

名アルモノハ、其名ニ誇ルコト勿レ、宜ク自以テ名ニ

副フ所ヲ易ムヘシ、毀ヲ承ルモノハ、其毀ヲ避ルコト

勿レ、宜ク自以テ毀ヲ來ス所ヲ求ムヘシ、是ノ如ク

功ヲ著ク、毀譽並ニ我ニ益アリ、同上

○伊藤蘭嶼博學ニシテ文ヲ能ス、紀伊侯ニ仕ス、其

補テ侯ノ前ニ講スル時、書ニ對シテ講セス、滿坐掌

汗ス、以爲ク是寒素ニ生長ス、未大人ニ説クニ慣

ハス、其巍々然タルヲ視テ然リト、中使促セトモ應
 ゼス、侯亦コレヲ訝ル、既ニシテ蘭嶋徐ニ曰ク、公禱
 ニ坐ス、聖人ノ書ヲ講ズ可ラサルナリ、侯コレヲ聞
 キ、遽ニ禱ヲ去ル、是ニ於テ方ニ講説ス、音吐朗暢、辨
 論明備、座者ミナ歎賞シテ曰ク、真ノ儒者ナリ、

○加茂ノ真淵、遠江ノ人ナリ、少壯ニシテ濱松ノ逆
 旅梅屋氏ニ鞠ハル、其女ヲ以テ妻トス、晨夕心ヲ書
 籍ニ潛メ、家事ヲ治メス、義父ノ憎ム所トナル、其妻
 真淵ニ謂テ曰ク、妾子ノ才ヲ觀ルニ、豈逆旅主人タ
 ルモノナランヤ、妾幸ニ一男ヲ産ス、撫字成立、以テ

家ヲ嗣カシムルニ足ル、請フ子終身ノ策ヲ決シ、名
 ヲ天下ニ揚ケヨ、真淵因テ京師ニ來奔シ、荷田春滿
 ニ從テ學ス、爾後妻堅ク節ヲ守ル丁數十年、真淵亦
 竟ニ國學ヲ以テ聞ユ、

○范仲淹ニ歳ニシテ孤ナリ、母夫人貧シテ依ルコ
 トナシ、再常山ノ朱氏ニ適ク、既ニ長シテ其世家ヲ
 知り、感泣シテ去リ、南都ニ之ヲ學舎ニ入り、一室ヲ
 掃テ晝夜講誦ス、其起居飲食、人ノ堪サル所、而ルニ
 仲淹自刻シテ益苦メリ、居ル丁五年、大ニ六經ノ旨
 ニ通シ、文章論説ヲ爲ル丁、必仁義ニ本ツク、

○王曾發解南省廷試ニ、ミナ首冠トナル、或コレニ
戲テ曰久、狀元三場ニ試ラル、一生喫著ストモ盡シ、
公色ヲ正クシテ曰久、曾平生ノ志、温飽ニ在ラス、
○明王陽明、年十一ナルトキ、師ニ問フ、何ヲカ第一
ノ事トスル、師言フ、書ヲ讀ミ及第スルノミト、陽明
曰、此レ未第一ノ事トセズ、第一ノ事ハ、其レ聖賢夕
ルニ在ラシカ、

第八章

○書ニ云久、疑ヲ蓄レハ謀ヲ敗ル、怠忽ナレハ政ニ
荒ム、學ハサレハ面ニ牆シ、事ニ莅ンテ惟煩シ、

功ノ崇キハ惟志業ノ廣キハ惟勤メ、惟克果斷ナレ
ハ後ノ艱ナシ、

○事ニ臨ンテハ、明敏果斷ヲ以テ是非ヲ辨ス、胡文定

○果斷義ヨリ來ルモノアリ、智ヨリ來ルモノアリ、
勇ヨリ來ルモノアリ、義ト智トヲ并テ來ルモノアリ、

リ、上ナリ、徒ニ勇ノミヲ以テスルモノハ殆シ、言志
晩録

○源義經ノ鶻越ニ向フヤ、路險ニシテ夜黒シ、鶻尾
經春ヲシテ鄉導セシム、鶻越ノ險何如ト問フ、經春

曰久、太險、人馬行ヘカラス、唯鹿能コレヲ踰ユ、義經
曰久、鹿四足、馬四足、等キノミ、衆ニ先チ之ニ馳セ、鶻

越ニ至レハ則天明久城中ヲ頽視ルニ生田一谷ニ
門戰方ニ酣ナリ、義經急ニ之ニ應セント欲ス、而シ
テ懸崖數百仞、經春言フ所ノ如シ、衆相目シテ敢進
ムモノナシ、乃試ニ鞍馬ニツテ馳リ、之ヲ下ス、一ハ
傷キ、一ハ達ス、義經曰久、下ルヘシ、乃其騎ル所ノ馬
ノ後足ヲ屈シ、一鞭ニシテ下ル、三千騎皆コレニ倣
ス、冑鞍相觸レ、直ニ城後ニ達ス、

○關原ノ役、徳川内府マサニ江戸ヲ發セントス、石
川家成曰久、臣星家ノ言ヲ聞久、今歲西方塞ル、請フ
方ヲ避テ發セヨ、内府曰久、西方塞ラハ則我撃テ之

ヲ開ント、遂ニ發ス、東海道ヨリ鼓行シテ西ス、近畿
將士爭テ使者ヲ發シ、狀ヲ馬首ニ上ルモノ、絡繹道
ニ属ス、而シテ東北空虚ス、

○楚ノ屈瑕マサニ貳軫ニ盟ントス、鄭人蒲騷ニ軍
シ、將ニ隨絞州蓼ト楚ノ師ヲ伐ントス、莫敖コレヲ
患ス、關廉曰久、鄭人其郊ニ軍ス、必誠ジ、且日ニ四邑
ノ至ルヲ虞ル、君郊郢上次リテ以テ四邑ヲ禦ク、我
銳師ヲ以テ霄鄭ニ加シ、鄭虞心アリテ其城ヲ恃ム、
鬪志アルモノナケン、若シ鄭ノ師ヲ敗ラハ、四邑必
離シ、莫敖曰久、盍ソ師ヲ濟ス、王ニ請ハサル、對

テ曰ク、師ノ克ハ和ニアリ、衆ニアラス、商周ノ敵セサル、君ノ聞ク所ナリ、軍ヲ成シテ以テ出ツ、又何ソ濟サン、莫敖曰ク、之ヲトセン、對テ曰ク、トハ以テ疑ヲ決ス、疑スンハ何ソトセント、鄭ノ師ヲ蒲騷ニ敗リ、遂ニ盟テ還レリ、

○司馬君實幼穉ナルトキ、多クノ童子ト共ニ或ル家ノ庭ニ遊ビ居ケルカ、其庭中ニ大ナル甕アリテ水ヲミテタリ、ヨリフシ一人ノ童子、ソノ甕ニヨチノホリ、甕口ノ縁ヲマハリ、歩ミテ戯レタリシカ、足ヲ失シテ甕中ニ陥リタリ、多クノ童子等狼狽シテ

救フニ術ナシ、君實大ナル石ヲ拾ヒキテ、其甕ヲ拵チクタクカントシタルヲ、他ノ童子ラ之ヲ碎カハ主人ノ怒リニ觸レント云フ、君實一甕ハ輕シ、人命ハ重シト云テ、石ヲ投テ甕ヲ碎キ、ソノ童子ヲ救ヘリ、成長ノ後宰相トナリ、大ニ天下ニ名アリ、齋藤拙堂カ、君實擊甕圖ニ題スル文ニ云ク、公ノ仁勇、既ニ卮角ノ日ニ於テ之ヲ見ル、何ソ必ス台鼎ニ登リ、鈞軸ヲ秉ノ日ヲ待テ、而シテ後コレヲ知ランヤト、信ナリ、

○元ノ成宗元貞元年、陝西旱シテ饑ウ、行省右丞許

辰倉ヲヒラキ之ヲ賑ハサント議ス、同列イマ夕奏
 請ヲ經サルヲ以テ可トセス、宸カ曰久、民ハ邦ノ本
 夕リ、今饑餒カクノ如シ、モシ命ノ下ルヲ俟夕ハ及
 フト無シ、擅ニ發クノ罪、吾マサニ之ニ任スヘシト、
 遂ニ廩ヲ發ラキテ賑貸ス、命モ亦尋テ下ル、

修身初訓卷之七終

定價金七角五分

明治十五年三月廿四日版權免許
 同 年 五 月 刻 成

編輯人

福岡縣士族
 宮本茂任
 福岡縣福岡區東小姓町
 六番地居住

同
 宗盛年
 同縣同區地行八番町
 二千五十番地居住

出版人

福岡縣士族
 江藤正澄
 福岡縣福岡區簀子町
 三十七番地

同
 林斧介
 同縣同區同町
 百三番地

同
 月成重三郎
 同縣同區本町
 六番地



出版人

同 同 同 同 同 同

彌岡縣士族

池

園

訥

同縣同區上名島町

六十五番地

同

長

濱

竹

次

郎

同縣同區下名島町

五十七番地

同

山

崎

橋

口

町

登

同縣同區橋口町

四十番地

同

古

賀

男

夫

同縣同區同町

二十三番地

同

舟

民

木

彌

七

同縣同區博多中島町

四十番地

同

士

族

右

田

喜

久

郎

同縣同區上洲崎町

五十三番地

同

高

田

芳

太

郎

同縣同區麴屋町

十二番地

修身初訓 八

72
387

大日本教育會館書籍			
一	五	一	一
〇	號	架	函
册			

函
一
架
一
號

東
方

K